

## ロシア沿海地方の麗姿

ノハナシヨウブの自生地を求めて

平成二十年九月 在モスクワ 関根秀人

七月六日、曇り。ウラジオストク  
空港到着。ある程度は予想していた  
とはいえ、モスクワのカラツとした  
大陸性の夏の陽気に慣れた体は極東  
の蒸し暑さに圧倒された。空で一晩



ノハナシヨウブ

過ごしたため、昼はウラジオストク  
植物園の近くにある軍の保養施設で  
休み、夕刻、新潟から合流した協会  
理事長の清水さんを植物園のアイリ  
ス研究者であるミローノヴァ女史と  
ともに迎える。

ミローノヴァ女史はロシアの  
アイリス研究者の中でも唯一の  
花菖蒲 *I. ensata* の専門家で、  
モスクワ、サンクト・ペテルブ  
ルグのアイリス研究者から紹介  
を受けた人物である。翌日から  
始まる植物園職員三名と一緒に  
フィールド・ワークの旅にそな  
え、就寝。

七月七日、晴れ。施設の食堂  
で朝食を済ませ、ウラジオスト  
ク植物園へ。今回の旅の道先案  
内人であるブシェンニコヴァ女  
史の案内で植物園を見て回る。  
日本でならごくありふれたもの  
かもしれないが、モスクワを合

む欧州ロシアでは見慣れない草木を  
目の前にして、あらためて 7500 キ  
ロの隔たりを実感。

ミローノヴァ女史の母親が焼いて  
くれたピロシキと紅茶で小腹を癒し、  
もう一人の植物園職員であるアルヒ  
ーポヴァ女史とともに、ソ連製のお  
んぼろマイクロバスで出発。ちよう  
どこの時期、ほかの植物研究者らも  
自分らの専門の植物採集を目的とし  
てフィールド・ワークに出るらしく、  
割り当てられたマイクロバスはひど  
く老朽化し、メンテもろくにされて  
おらず、道中何度もオーバーヒート  
を起こし、初日から思うように距離  
をこなせない。

まだウラジオストク市を離れてま  
もなく、車が故障して修理している  
間、近くを散策すると、牧草地の一  
角に点々と咲くノハナシヨウブを発  
見。清水さんいわく、牧草地で土壌  
が肥えているせいか、花が若干大き  
めだそう。カメラは車に忘れ写真  
に収めることできなかったが、この  
先見られることを期待し、北へ向け  
て出発。

当初予定した地点まではまだ遠く、  
夕暮れさしかかったところで開けた

丘の上にテントを張り、野営の準備  
にとりかかる。清水さんの薪割りの  
手際の良さにびっく。

七月八日、晴れ。朝食後、車の機  
嫌を伺いながら、ハバロフスクへ向  
かう街道をひたすら北上。

途中、沿海地方に見られるハスが  
植えられた人造湖に立ち寄り、女性  
陣と私は水浴びを楽しむ。ハスの花  
が咲くのは8月後半だそう、大き  
な葉を広げはじめたところだった。

街道沿いにたまに紫色のノハナシ  
ヨウブが見える。湿地ではとくに  
花の咲き終わったカキツバタも目視。  
そしてこの日の目的地である、今回  
の旅の最北の地点で、日本の尾瀬湿  
原のようなどころへ到着。

本来はこの辺りにもノハナシヨウ  
ブが群生しているのだが、ウラジオ  
ストクからはかなり内陸に入ってい  
るためか、夏の気温の上昇が早いよ  
うで、すでに花期が過ぎ、いくつか  
残って咲いている程度だ。平日にも  
かわらず地元の酔っ払いがたむろ  
しているため道を引き返し、落ち着  
いた川辺にテントを張り、再び川で  
泳ぎ、星が空一面に輝く空の下、夕

食をとり、就寝。

七月九日、曇り。来た街道を今度はひたすら南下し、中国との国境にまたがるハンカ湖沿いの自然公園の一角にある野生動物の増殖センターに立ち寄る。土日の決まった時間しか公開していないが、いまでも「科学アカデミー」所属というのはロシアではステータスのあることで、植物園職員一行ということで案内してもらい、アムールタイガー、アムール山猫、狸、ヒグマなどをまじかに見る。近寄るとうなり声を上げ凶暴そうだが、檻の外から見ている分にはどれも愛らしい。終日期待していた水浴びもあきらめ、移動開始日の夜にテントを張った場所へ戻り、焚き火を準備。夜からポツポツと雨が降り始める。

七月十日、雨。テントのシートもかなり湿ってしまい、軽く朝食を済ませ、萩の花の咲き乱れる野原を後に、北朝鮮、中国と接する沿海地方南部のハサン地方へ向けて出発。小雨が降り続く中、紫色のノハナシヨウブとともに、センノウの鮮やかな



赤、キスゲの淡い黄色、キンバイソウの鮮やかなオレンジ色が現れては消えて、目の前を通りすぎていく。何度か車を止め、雨合羽もびしょ濡れにしながら、野外観察を繰り返し、とにかく一刻も早く水浴びをしたいのと、今晩は何かテントではなく屋根の下で寝たいという気持ちでいっぱいだった。すでにウラジオストクを迂回し、昼も過ぎた、街道沿いのある村にさしかかったところで、地元の村人が

#### キスゲ

作るプリンチキ（パンケーキにコッテージチーズなどを包んだもの）とヴァレネッツという加熱した酸乳をいただく。食欲が満たされ、ややうとうとし始めるや、プシエンニコヴァ女史の鷹の目がしばらく緊張気味となり、「着いた！」の一声。

そこには、おりしも雨上がりの霧が立ち込めるなか、道の左右に鮮やかなノハナシヨウブの紫色が荘厳さを増して浮き立っていた。今回の旅の中で最大のノハナシヨウブの自生地とのことで、私はまたいつ見ることができるかわからないこの光景を少しでもたくさん写真に残しておきたい一心でシャッターをきり続け、その間に女性陣と清水さんは湿った下草をもともせず、色変わりしたもののや珍しいタイプをせっせと探し歩く。

ここでもキスゲやセンノウ、カキランなどの野草が咲き乱れていた。色の濃さ、花弁の形の多少の違いはあるものの、ほとんどは紫色の花で、2時間強歩き回った結果、いくつかわかたもみもみ、桃色の花弁のものを目視。フィールド・ワークもじゅうぶん堪能し、ノハナシヨウブの大自然地を後に、こ

の日の宿泊地へ移動。

スラヴァンカという町からそれ、日本海に面した潜水士養成センター付属の保養施設のバンガローひとつを貸切る。冷たい水とはいえ待ちに待ったシャワーを浴び、女性陣の作ったボルシチとサラダ、魚の缶詰で夕食。

旅程中、だいたいパターンは同じだが、身沢山のスープ、野菜のサラダ、肉か魚と、現地ではあまり種類を感じている余裕もなかったが、今



筆者



思い返せばなかなか工夫してくれていたと思う。暑い車での移動をともにし、日本人ふたりの世話をし、夕食の準備は女性たちの役目。毎晩異なる種類の果実酒を用意していて、その豪快な飲みっぷりに、ロシアの女性は強いものだと改めて感心。

七月十一日、晴れ。日本にも資源材を積み出しているザルビノ港を通

り過ぎ、なだらかな湾に面した花畑へ。ここにもノハナシヨウブが群生している。前日の規模とは比べものにならないが、枯れたエーデルワイスの花やおきな草の綿毛が揺れ、海辺らしく海蘭やハマナスがところ狭しと生える中、小川沿いにノハナシヨウブがやわらかな曲線を描いて咲き乱れている。

おそらく五月ごろの沿海地方も野草愛好家にはたまらないフィールドと想像する。しばし植物を観察し、やはり遠浅のきれいな海辺を目の前にし、内陸モスクワで暮らす私としては水遊びをしないわけにはいかず、女性陣と一緒に真夏の太陽のもと海水浴を楽しむ。

七月十二日、晴れ。結局、車は最後の最後まで故障の連続。車窓からみえるノハナシヨウブやその他の植物を見納めながら、ウラジオストクへ向け移動するが、帰路の途中、チャーターしたマイクロバスはいよいよ動かなくなり、女性陣それぞれの旦那がかけつけ、われわれもミロ

ーノヴァ夫妻とともに、再び植物園の近くの保養施設へ。この晩は、夫妻とともに市内中心のレストランへ招待され、極東らしく海の幸を中心に美味しいロシア料理を楽しみ、市内の観光名所を車で案内してもらった。

七月十三日、曇り。朝、ミローノヴァ夫妻の別荘に立ち寄り、旦那さん自身が立てたコテージをみせてもらったり、菜園に育つ赤スグリやお隣さんから差し出されたキャベツの浅漬けをいただく。ロシアの短い夏の楽しみそのものだ。それぞれ目的を達成し、清水さんは新潟へ、私はふたたびモスクワへ向かった。

最後に

モスクワ郊外で花菖蒲の庭を造りはじめた私にとって、このロシア極東へのノハナシヨウブ自生地を自らの目で見るというのは、夢であり、ちよつとした冒険でもありました。

インターネットが普及した今日、時間と距離を越えて世界の情報を瞬時にして得ることができるようになったとはいえ、ロシアの情報という

のはまだまだ限られたものです。おなじロシアでも、モスクワと極東では気候も違えば、食べるものにも違いがあり、植物をみてもこんな多様さがあるのかと驚かされました。

モスクワやサンクト・ペテルブルグの花菖蒲の愛好家からは、ノハナシヨウブを見るのであれば、極東を訪れることをすすめられ、今年の春先から清水さん、ロシア科学アカデミー極東支部ウラジオストク植物園の研究者とともに打ち合わせをすすめた結果、今夏の探検が実現しました。

道中、アイリスのみならず、さまざまな植物のお話をうかがわせていただき、また、過酷な条件にもかかわらず無理ひとつおっしゃらずに旅程をこなしてくださった清水さんには心よりお礼申し上げます。

今後この私の好きな花を通じ、日本とロシアの橋渡しができればと思っております。